

教育長だより

鹿児島県三島村教育委員会
教育長

室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島島学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教育委員会指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の学校数が多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会長も務めた。

海に囲まれた我が国には、約6800余りの島があるそうです。島の数が一番多い県は長崎県ですが、島にある学校数が一番多いのは鹿児島県です。鹿児島県は、北は長島町から南は与論町まで南北に約600キロメートル。これは鹿児島市から大阪市の直線距離とちょうど同じくらいです。この長い海上に、大きな島や小さな島々が連なって浮かんでおり、それぞれの島に合わせて約200校余りの小・中学校が点在しています。へき地にある学校の割合が約40%、小学校の複式学級の割合が約10%で、全国で最も高い数値を示しています。

このような現状から、鹿児島県の教職員には独特の人事異動のルールがあります。それは、在任期間に必ず1回以上は離島の学校に赴任しなければならないというルールです。県の教育を公平に分担するために、毎年、全県的な人事交流が行われており、場合によっては3月の人事異動で600キロの旅をする教職員もいることになります。ですから鹿児島県の教職員は、明確な人生設計をもって人事異動に備えておくことが必要です。県外の先生方にこの話をすると一様に驚かれますが、「二十四の瞳」の世界のような教師生活への憧れは、皆もっているのではないかでしょうか。人生で1回は離島で教師をする。この人事異動ルールを、鹿児島県の教師になるよさととらえている教師も多いと思います。

また、鹿児島県は、「山村留学生受入人数」も全国1位となっています。県内の約半数の小・中学校がへき地・小規模校であり、児童生徒数の減少が大きな課題となっているため、少人数指導によるきめ細かな教育や特色ある教育活動を生かし、山村留学制度を充実させることによって学校や地域の活性化を図っています。山間部から離島まで22の市町村がそれぞれユニークなネーミングで特色ある取組を展開しています。例えば、ウミネコ留学、ほしだら留学、宇宙留学、かめんこ留学…などなどです。

三島村では「しおかぜ留学」と銘打って取り組んでいますが、この事業は村の施策の中でも最も重要な柱の一つであり、生命線ともいえるものです。なぜならこの制度があるからこそ、学校は閉校に追い込まれることなく存続することができているからです。

何といって子どもの輝く笑顔や笑い声は、まわりを元気してくれます。子どもには不思議なパワーが与えられているのかかもしれません。島からこのパワーが消えてしまえば、島の活力が失われていくのは必至です。

またこの制度は、日本の教育課題を解決することにも大きな役割を果たすことができるのではと感じているので、それは次号に繋ぎます。



教育長だより

鹿児島県三島村教育委員会
教育長 室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の学校数が多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会長も務めた。

「三島村は、日本の保健室ですね」と、表現された方がいらっしゃいました。子どもたちが親元を離れ、農山漁村の受け入れ家庭（里親）のもとで暮らし、地域の小中学校に通う「山村留学」。都会育ちの子どもたちにとって、自然に囲まれた生活は、何もなくても新鮮であり、逆に都会よりも刺激的かもしれません。

現代の子どもたちの感受性や五感の劣化、人間関係や対人関係のつまずきは、自然体験・生活体験の不足がその一因ではないかという声は数年来言われ続けていますが、その流れは止まる所を知りません。かつての子どもたちは、放課後や休日には野山を駆け回り、昆虫採集をしたり、秘密基地を作ったり、「遊び」を通してさまざまなことを学び、さまざま「生きる力」を育んできました。自然体験が、五感を刺激し、好奇心を育み、感動する心や豊かな感受性を培ってくれたのですが、今、その環境は求めなければ体験することはできなくなりました。

三島村の「しあかぜ留学」は、平成9年からスタートしました。現在、全児童生徒（約80名）の約4割が全国からの留学生で、約3割が教職員の子どもたち。このことから分かるように、留学生がいるから学校が存続し、教職員とその家族が移住し、子どもたちの数が増えて、学級数や教員数が最小限確保されています。

「子どもが地域にいるだけで有難い」そんな思いを小さな村にいるとしみじみと抱きます。子どもたちの声や笑顔はもちろん、その存在そのものによって、大自然のエネルギーが息を吹き返すようです。また、先生方や子どもたちがいなければ成り立たなくなってしまった地域の活動や、貴重な伝統行事も生き続けていきます。

留学生の動機はさまざまですが、本村の場合、不登校傾向の子どもが多くを占めています。町の大きな学校には馴染むことができなくても、村の小さな学校では自分らしさを大いに發揮して休むことなく登校できるのです。子どもたちは、環境さえ整えば自分の体験を通して自分で育つ力を授かっているのではないでしょうか。

増え続ける不登校や引きこもり、家族の不安やストレス。現代社会の抱える課題は複合的に絡み合い、その固いもつれはかなり強烈です。いじめ、貧困、児童虐待、ゲーム依存、さらには、過疎化・高齢化、地域の繋がりの希薄化、ひとり親家庭の増加など、何重にも絡み合う。

なかなか先に進まない「地方の時代」ですが、最も大きな教育課題の一つである不登校問題と児童生徒減少対策の「山村留学」がうまくマッチングすれば、関係人口の増加、地域活性化など、意外に大きな効果を発揮すると思うのです。「日本の保健室」のような地域が全国各地にあれば、固いもつれも解けていくかも知れません。

学校から里親さんへ小5の留学生が登校していないという連絡がありました。「朝、元気に家を出て行ったのに」心配した里親さんが探しに行くと、通学路でしゃがみ込んでいる彼を見つけました。

好奇心旺盛な少年は、アリの行列を見つけてずっと観察していたのです。その横には村のお年寄りが立っていました。畑に行く途中でしたが、夢中で観察している彼を心配してずっと見守っていてくれたのでした。



教育長だより

鹿児島県三島村教育委員会
教育長 室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教育委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校校長を経て現職。全国一離島の学校数が多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校校長も務めた。

「新しい生活様式」を駆使しながら見えない敵と闘う。想像だにしなかったことが現実となり、学校教育も大胆な発想の転換が求められています。従来なら撻破りといわれそうな裏技も、まな板に載せられて真剣に検討されています。いずれにせよ、学校の価値、有難さを再認識するとともに、教育に対する考え方を固定観念に囚われず根底から見直す機会ととらえ、前を向いて進むしかありません。

日本が出遅れているといわれる遠隔授業。私の村は、文科省の遠隔教育システム導入の委託を受けて実証研究2年目に入っています。それ以前も独自に遠隔授業に取り組んでいましたが、感染症予防に威力を發揮するとは思っていませんでした。これを機に遠隔教育は急激に加速していくと思われますが、導入に当たりどんなハードルがあり、どんな工夫が必要なのか、この小さな村の実践も少しはお役に立てるように、実践上の具体的な助言ができたらと思っています。

ちょっと話が横道にそれますが、オーバーシュート、ロックダウン、クラスター、ソーシャルディスタンス、ウィズコロナ、アフターコロナなど、今年になって広く使われるようになった目新しい横文字。日本語を英語に変換するときに、なかなか適切な表現が見当たらない言葉があるように、英語にも日本語に置き換えるのが難しく、カタカナでしか表現しようがない言葉があります。また、新しい概念をもった言葉が出現したり、古くからあった言葉でもカタカナに言い換えると新しい言葉に生まれ変わったりすることもあるでしょう。単純に横文字になると格好いいという効果もあります。そんなことを考えていたら「新しい生活様式」という言葉があまりにも素朴な感じがして、「これは日本語なんだ！？」と面白く思ったわけです。確かに「ニューライフスタイル」よりも逆に新鮮なのが。

横文字のほかにも、政策を批判する際に「ブレーキとアクセルを同時に踏む」とか「冷房と暖房の両方をかける」という表現を耳にするようになりました。なるほど言い得て妙だなと面白く思いながらも、古くからの言い回しである「アメとムチ」とどう違うかなとふと考えました。正反対の効果を発揮する物を並べていますが、それを同時に使うか、使い分けるか、というところが味噌なんですね。同時に使うと混乱して役に立たないが、うまく使い分けると効果絶大。対立も否定も、捨てもしない。正にハイブリッド、アウフヘーベン（あ、これも横文字）。

閑話休題。限られた紙面で閑話が多くなってしまい本題について語るスペースがなくなってしまいました。従来の教育と未来型の教育とどう組み合わせるか。デジタルとアナログのそれぞれのよさをどのように生かすか。そんな話につなげたかったのですが、脇道に逸れたまま元に戻れない下手な現職時代の頃の授業のようになってしまいました。

本題の遠隔授業については更に次号で。



三島村の遠隔授業の様子